

スウェーデン——福祉社会の模索

石原 俊時

- 1 フィランソロピー研究の興隆
- 2 自発的結社とフィランソロピー団体の生成
- 3 19世紀末葉におけるフィランソロピーの勃興
- 4 社会事業中央連盟
- 5 福祉国家の成立とフィランソロピー

1 フィランソロピー研究の興隆

スウェーデンにおいては、旧来、自発的な公益活動としてのフィランソロピーを対象とした研究、特に歴史研究はマージナルな存在であった。それは、一つには、20世紀に入り福祉国家が成立してくる中で、それらが担っていた領域（特に社会サービスの領域）が国家福祉に吸収されていったことによると考えられる。つまり、フィランソロピーは、国家福祉が確立してくる前の段階の存在であり、福祉国家によって歴史的に克服されたと見なされてきたのである⁽¹⁾。

しかし、1970年代にいわゆる福祉国家の危機を迎え、90年代以後グローバリゼーションが展開する中で、スウェーデンにおいても福祉見直しが余儀なくされた。例えば、1991年の総選挙でブルジョワ連立政権が誕生し、早速開始されたのが社会サービス法の見直しであった。そこでは福祉供給主体の多元化が課題の一つとなった。法案準備のための政府調査委員会で注目されたのが、フィランソロピーの歴史的伝統である。例えば、調査報告書の一つが自発的な社会事業（frivilligt socialt arbete）をテーマとし、その中心にフィランソロピーを置いた。その中の一章が、思想史家クヴァッセルによるスウェーデンにおけるフィランソロピー概念についての論文であった（Qvarsell 1993）。こうして、福祉供給主体の多元化の必要性が認識されるにつれ、これまでの福祉国家にかわる新たな社会福祉のあり方を、福祉国家成立以前のフィランソロピーの展開に探る動きが強まったと思われる⁽²⁾。

(1) 例えば、Förhammar 2000, s.13, 28-29を参照。

(2) 福祉供給主体の多元化の課題と関連して、「福祉国家」に対するものとして「市民社会（det civila samhället）」を位置づける議論が展開されている。例えば、Trädgårdh 1995を参照。本誌中野論文で見えるドイツでの「市民社会」への注目との共通性と差異が検討されるべきであろう。

また、1993年にウメオー（Umeå）大学で「女性、フィランスロピー、福祉国家とその後？」というシンポジウムが開かれたように、ほぼ同時期に女性史研究によっても関心が向けられるようになった。そうした関心の高まりには、19世紀のフィランスロピーの勃興は女性に担われたのであり、女性解放の歴史的過程の中で重要な一段階を占めていたとの認識があった。例えば、当時のフィランスロピストは、自分達の活動は女性の特性を活かしたものであり、女性こそ相応しいと主張したのであったが、男性が公共空間で公的な役割を果たし、女性は家にいて育児や家事を行うという19世紀社会における性的役割分業が見直される端緒として、フィランスロピーの論理と実践が位置づけられるようになったのである⁽³⁾。

以下では、フィランスロピーの歴史的展開を、そこにどのようなスウェーデン的特質があるのかに留意しつつ、主にクヴァッシエルの議論に基づき概観することとする。

2 自発的結社とフィランスロピー団体の生成

スウェーデンにおいてフィランスロピー団体が本格的に成立し始めたのが1810年頃のことであると言われている。19世紀前半には、スウェーデンでも大衆貧困化現象（pauperismen）が見られ、世紀半ばには二月革命の影響もあり、社会不安が高まっていた。そうした中でフィランスロピー団体が次々と設立されるようになる。

それらの団体は、眼の前の貧民を場当たりの助ける喜捨（allmosa）を批判し、貧民の経済的自立化を長期的に実現しようとする指向を強く持っていたとされる（Qvarsell 1993, s.222-224）⁽⁴⁾。例えば、1819年にストックホルムで設立された婦人聖書協会（Frunntimmers Bibel-Sällskapet）は、そうした初期のフィランスロピー団体を代表する存在であるが、真の慈善とは、貧民と直に接することを通じて貧民のニーズを判断し、その自立化を図ることであると主張した（Åberg 1983, s.14-15）。

また、それらは、身分制的社会秩序の解体を促した中間層（medelklass）の勃興や自発的団体（association）の叢生といった現象の一環としても捉えられる。婦人聖書協会は、1815年に信仰復興運動の影響の下に下層民衆に至るまで真の信仰を普及させることを目的に設立されたスウェーデン聖書協会（Svenska Bibelsällskapet）の姉妹組織であった。この聖書協会は、しばしば、同時期の自発的結社の代表例として取り上げられる。また、1840年代から各地に婦人保護協会（fruntimmers-skyddsföreningar）が設立された。ストックホルムでは、教区毎に組織が作られた。それらのうちの最初の団体の設立のイニシアティブを取ったのは、自由主義者で数多くの自発的結社の設立を主導し、『スウェーデン統計概観』の著作でも有名なカール・アヴ・フォッシエル（Carl af Forsell）であった。大衆貧困状況やそれに伴う社会的不安の増大に、中間層が中心となり自発的結社の枠組

(3) シンポジウムの記録としてSjögren&Vammen1995、女性史の観点からのフィランスロピー研究として、例えば、Jordansson 1992; Jordansson&Vammen 1998なども参照。

(4) クヴァッシエルは、当時、慈善（välgörenhet）は喜捨を含むより一般的な語であったとし、それらとより組織的で長期的な視野をもったフィランスロピーとの差を強調する。Qvarsell 1993, s.223-224。しかし、フォルハンマルによれば、フィランスロピーと慈善の語は、同時代では区別されていなかった。Förhammar 2000, s.24-25。

の中で対応しようとしたのが、フィランソロピー団体の隆盛となって現れたといえよう⁽⁵⁾。

さらにそれらの団体は、概して公的救貧と密接な関係を持ち、相互協力を追求していた。例えば、ストックホルムの婦人保護協会は、執行部に市の高官や救貧行政の担い手がいて重きをなしたが、規約では公的救貧を補完することを課題とした。具体的には、救貧員（ordningsman：男性）の指示に従ってメンバー（女性）が2人組となって貧民の家を訪問し、日常生活を監督・指導するとともに、貧民に関する情報を収集した。このようにして成立した救貧のシステムは、いわゆるエルバーフェルト的な救貧制度として位置づけられている（Press 1994, s.123）。婦人保護協会と公的救貧との協力関係の存在は、ウプサラなどについても指摘されている（Furuland 1987, s.103-106）。

元来、スウェーデンにおける公的救貧は各自治体に財源が任され、脆弱な財政的基盤しか持たなかった。1847年に救貧法が成立する以前は、いかなる貧民をどのように救済するかは地域社会に任せられていた。公的救貧の担い手もフィランソロピーの担い手も地域の有力者であり、財源を負担するのも共通していた。それゆえ、公的救貧とフィランソロピーとの間の境界は曖昧であり、両者間の役割分担は流動的であったとされる。その後、47年に救貧法が成立すると、労働能力が不足し自活し得ない者の救済義務が定められ、貧民には救済の決定に対する不服申し立て権も与えられた。公的救貧の側からすれば、このように救済義務が強化され救貧負担が重くなる中で、フィランソロピーによる自助の促進や貧困に対する予防活動の重要性が高まることとなった⁽⁶⁾。

3 19世紀末葉におけるフィランソロピーの勃興

スウェーデンでは、1870年代に工業化が本格化したといわれる。それと同時に、社会問題の労働者問題化が指摘された。それまで、社会問題は何より農村下層民の問題であったが、都市化・工業化に伴い、都市の劣悪な居住環境や労働環境などにその内容が変化したのである。一方では、1871年に救貧法が改正され、救済対象が制限されると共に、貧民の不服申し立て権はなくなった。こうした社会問題の性格変化や公的救貧の戦線後退により、フィランソロピーのさらなる発展が社会的に要請されるようになった。

1889年には、イギリスのCOS（Charity Organization Society）をモデルとして、ストックホルムで慈善調整協会（Föreningen för välgörenhetens ordnande：以下FVOと略記）が設立された。この団体は、宗教的・政治的中立の旗の下にフィランソロピー諸団体相互のみならず、それらと公的救貧との協力関係を推進することを課題とした。例えば、貧民の救済申請を受け付けると共に、ストックホルム市の救貧委員会や他のフィランソロピー団体との情報交換を通じて貧民の情報を集積する場として中央事務所（centralbyrå）を設けた。他のフィランソロピー団体や公的救貧から貧民の紹介を受ける一方、逆にそれらに別の貧民の対応を要請した。全体として、一時的に困窮してい

(5) スtockホルムの婦人保護協会については、Press 1994を、フォッセルについては、石原2005を、19世紀の自発的結社の勃興とその歴史的な位置づけについては、Janson 1985を参照。

(6) 例えば、19世紀半ばのイエーテボリイにおける公的救貧とフィランソロピーの協力・分業関係の進展についてはJordanson 1998を見よ。

る者はFVOほかフィランソロピー団体が救済し、さらに貧困を予防する活動を推進する一方、高齢や慢性病などの理由で困窮している者は公的救貧に任せられたという。1911年には、市の救貧委員会から救貧受給者の登録記録を移管され、登録事務所を設立することとなる。この登録事務所は、ストックホルムにおける貧民の情報データベースとして機能した (Sjögren 1999)。

このようなFVOの成立にとり、1866年に設立されたストックホルム一般保護協会 (Stockholms allmänna skyddsförening) の存在も無視できない。この団体は、ストックホルム各教区の婦人保護協会が合併して成立した組織であり、各教区をいくつかの地区に区分して貧民の家庭への訪問活動を綿密に行くと同時に、公的救貧との協力関係を推し進め、公的救貧やフィランソロピー諸団体や各種基金の受給者の情報を集め、相互に利用しあうことを目指した。しかし、結局この活動はそれほど成果を収めることはできなかったといわれる。一般保護協会代表がFVO設立会議に出席し、情報提供など真っ先にその活動に協力することとなった。設立翌年には、FVOの中央事務所に事務所を移して共同の事務所とした。FVOは、イギリスCOSの影響を受けて成立したのだが、組織を発展させていく上で、自国における一般保護協会の経験の蓄積も一定の役割を果たしたのである (Press 1994, s.132-133)。

一方、クヴァッセルは19世紀末葉に、社会科学の勃興と社会問題への関心の高まりが結びつく中で、フィランソロピー活動とアカデミズムにおける研究の結びつきが生まれ、活動の科学性が強調されてきたことを指摘する。こうした現象は、科学的フィランソロピー (vetenskaplig filantropi) の語で捉えられる (Qvarsell 1993, s.226)。フォルハンマルは、こうした科学的フィランソロピーの具体的な様相を以下のように明らかにしている。例えば、19世紀末葉から20世紀初頭のフィランソロピーをめぐる言説を分析し、協力・協調、知識、長期的観点、教育、情報などの諸価値が強調されるようになったことを示した。また、同時期のストックホルムでは、フィランソロピー団体が800余り存在したといわれるほどの隆盛を迎えた。その一つの特徴は、子供や障害者など救済対象が実は多様であるとの認識のもとに、それぞれに専門特化した団体が多く設立されたことであった。子供や障害者のみを対象とした団体の設立自体は19世紀の前半からも見られたが、対象者を分類し、それぞれ科学に基づく専門的な対応が目指され、それらの人々の自立化が標榜されるようになったことは新しい傾向であった。フォルハンマルは、ここにも科学的フィランソロピーの勃興を見ている (Förhammar 2000, Kap.7)。

こうした科学的フィランソロピーは、市民的公共性の拡大ともいえる状況の中で社会問題が一つの大きなトピックとなり、社会問題を客観的かつ科学的に調査し議論することが進展した現象を背景にしていた。科学性・客観性の強調は政治的中立の立場の強調につながり、社会問題をめぐる議論には、保守主義者から社会民主主義者、官僚、学者・知識人、政治家、実業家、労働運動指導者など様々な階層が参加していたのである⁽⁷⁾。

他方、フィランソロピーの歴史的展開については、イエーテボリイ (Göteborg) を対象とした Swedner 1993などのように、公的救貧に限らず他の福祉供給主体との関係を視野に収めながら、1871年救貧法以後についても地域研究が進められている。中でも、プリモートによる繊維工業都市

(7) こうした市民的公共性の拡大ともいえる状況については、例えば、Wisselgren 2000を参照。

ノルシェーピング（Norrköping）の研究は、地域的多様性を浮き彫りにした研究として注目されるべきであろう。まず、71年の救貧法は救済対象を限定したのであるが、適用が地域により多様であったことが指摘される。ノルシェーピングの場合、実際には、法文による規定よりも緩やかに対象は広げられて運用されたのである。それゆえ、他の多くの地域では、労働無能力者や自助の見込みのない者が公的救貧の対象で、自助の可能性のある者の一時的困窮をもっぱらフィランソロピーが対象とするといった分業が意識されていたが、ノルシェーピングではそのような分業が明確ではなかった。また、パターナルな工場経営者や商人が市政を牛耳っていたため、社会的・政治的に保守的であり、女性がフィランソロピー団体の執行部に加わるのも、科学的フィランソロピーの影響が見られるようになるのも、19世紀末あるいは20世紀初頭のことと他都市よりも20年程の遅れを見せた。公共的空間への女性進出が遅れ、救済に対しては、権利性よりも恩恵やキリスト教的慈悲が強調されることが続いたのである（Plymoth 2002）。

既に1980年代に、ストックホルムの公的救貧制度を研究したトゥルベリイが、公的救貧制度のあり方がフィランソロピーの発展の方向性を規定し、逆にフィランソロピーとの関係が、19世紀末葉から20世紀初頭にかけて多くの都市で行われた公的救貧制度の改革（例えば、エルバーフェルト制の導入）のあり方を決めた一因として挙げ、地域研究の重要性を強調したことが想起される（Thullberg 1988, s.36-39）。農村での状況を含め、地域的多様性をさらに解明する課題は残っていると思われる。

4 社会事業中央連盟

1903年にあらゆる社会事業活動の結節点となることを目指して、社会事業中央連盟（Centralförbundet för socialt arbete：以下CSAと略記）が結成された。その成立のきっかけとなったのは、FVOによる他の社会事業団体との協力関係の模索であった。したがって、CSAの成立は、FVOによるフィランソロピー諸団体の組織化の延長線上にあり、その起源をさらに一般保護協会や婦人保護協会に遡ることもできる⁽⁸⁾。

CSAは、「社会の各階層に社会問題についての関心や知識を喚起し、重要な社会問題の解決のための協力を実現していくこと」を課題とした。したがって、扱う問題は貧困や救貧の問題に限らず、都市問題や農村問題、禁酒問題、労働問題など広く社会問題全般に及んだ。加盟団体は、設立数年で70ほどに達し、FVOなどフィランソロピー団体に限らず、労働者教育（Folkbildningsförbundet）、疾病基金（Sveriges Allmänna Sjukkasförbund）、消費協同組合（Kooperativa förbundet）、禁酒運動組織（IOGT他）などの20以上の全国組織も加盟した。また、これに関連してその活動にアカデミズム内外の知識人や専門家のみならず、官僚や政治家、実業家、労働運動指導者なども動員されることとなる。このようにして社会問題への取り組みをめぐる広範な人的・組織的ネットワークが形成された。CSAは、自ら社会調査を行って社会問題の客観的把握に努める一方、こうしたネットワークに基づき、例えば、出版活動や社会啓蒙事務所の活動を通じて、国内外の社会問題や社会改

(8) CSAに関する諸研究については、石原 2011を参照。

良についての情報や知識を諸団体相互間に媒介した。こうして民間諸力を結集し、知識・情報ほか諸資源を有効に活用しつつ、社会問題を解決することを目指したのである。このようにフィランソロピーが自助や共助を促す他の自発的諸団体と相互に協力し、社会問題全体に対応しようとしたことは、フィランソロピーの歴史的展開におけるスウェーデン的特質の一つとして留意されるべきであろう。また、CSAの成立は、社会問題をめぐる市民的公共性の拡大ともいえる状況を背景にし、さらにそれを促したといえよう。

一方、そのネットワークには官僚や政治家を含み、CSAは、自発的諸団体の活動に彼らの力を利用しようとすると同時に、大規模な会議の開催や立法過程への有力メンバーの参加などを通じて社会立法や公的社會制度の形成に大きな影響力を揮った。CSAを中心とする世紀転換期の社会事業運動は、旧来の自由放任主義的自由主義への批判に基づく、国家介入に親和的な新たな自由主義の思想潮流に属するものだと指摘されている⁽⁹⁾。実際、CSAの関与した立法は、20世紀初頭に成立した社会立法の殆どに及ぶといわれているし、CSAは、1912年の社会庁、1920年の社会省の設立を推進した。また、そこでの有力ポストをメンバーで固めることとなる。クヴァッセルは、こうしたフィランソロピーの展開を政治的フィランソロピー (politisk filantropi) と名づけている (Qvarsell 1993, s.227)。

5 福祉国家の成立とフィランソロピー

しかし、スウェーデンでは、戦間期以後、福祉国家の成立を迎え、特に社会サービスが国家あるいは地方自治体によって担われるようになると、フィランソロピーは、国家福祉が進出した領域から撤退し、補完的な機能を担うに過ぎなくなる。普遍主義福祉国家の確立により、個人の特質や環境に留意しつつ自助の可能性を探っていくフィランソロピーの領域に、誰でも一定の社会サービスを受ける権利を充足させることを目指す国家福祉が進出するようになったのである。

それゆえ、クヴァッセルは、フィランソロピーの歴史的展開を公的救貧や国家福祉との関係に着目しつつ三つの段階に分けている。すなわち、19世紀半ばのフィランソロピーと公的救貧との間に緊密な関係が生成した段階。次に政治的フィランソロピーの勃興に見るように、19世紀末よりフィランソロピーが自助や共助を下支えするものとして積極的に国家による社会政策を求めるようになった段階。そして戦間期、特に第二次大戦後、国家福祉がケアや介護を引き受け、それとフィランソロピーとの間に対立が顕在化するようになった段階である (Qvarsell 1993, s.236)。恐らく、こうしたフィランソロピーと国家福祉の間の対立の局面の存在は、国家福祉の下で社会サービスが発展を見たスウェーデンの北欧型福祉国家の特質を表現しているものと思われる⁽¹⁰⁾。

(9) CSAを中心とするフィランソロピー団体の政治的圧力団体としての活動については、Lundquist 1997を、国家に親和的な新たな自由主義の思想潮流については、例えば、Kaveh 2006; Hedin 2002; Förhammar 2000, Kap.3を参照。

(10) 戦間期のフィランソロピー団体の動向については、Den privat-offentliga gränsen 1999に収められた諸論考を参照。この書物は他の北欧諸国の事例も扱い、戦間期における国家や地方自治体のイニシアティブの増大について北欧諸国における共通性や差異を浮き彫りにしている。

以上のように、フィランソロピーは、公的救貧のパートナーあるいは社会政策成立への積極的な役割など福祉国家スウェーデンの生成にとり重要な歴史的役割を果たしてきたことが明らかにされている。他方では、そうした歴史的な役割や経験は、今日の福祉国家の危機の下で掘り起こされ、今後の福祉社会への歩みに役立つことを期待されている。スウェーデン福祉国家がこれからどのような歩みを見せるのかと共に、これからもフィランソロピー研究の展開を見守りたい所以である。

（いしはら・しゅんじ 東京大学大学院経済学研究科准教授）

【文献リスト】

- Den privat-offentliga gränsen. Det sociala arbetets strategier och aktörer i Norden 1860-1940*, Nord 1999: 9, København 1999.
- Furuland, G. (1987), "En association i offentlighet och privatsfär: fruntimmersföreningens bildande i Uppsala 1844-45", i: Scandia.
- Förhammar, Staffan (2000), *Med känsla eller förnuft? Svensk debatt om filantropi 1870-1914*. Stockholm.
- Hedin, Marika (2002), *Ett liberalt dilemma. Ernst Beckman, Emilia Broomé, G.H.von Koch och den sociala frågan 1880-1930*, Stockholm.
- 石原俊時 (1995) 『『人口表』から『スウェーデン統計概観』へ』『北ヨーロッパ研究』第2巻.
- 石原俊時 (2011刊行予定) 「20世紀初頭スウェーデンにおける福祉社会」高田実・中野智世編『近代ヨーロッパの探求 福祉』ミネルヴァ書房.
- Janson, Torkel (1985), *Adertonhundralets associationer. Forskning och problem kring ett sprängfullt tomrum eller sammanslutningsprinciper och föreningsformer mellan två samhällsformationer c:a 1800-1870*, Uppsala.
- Jordansson, Birgitta (1992), "Hur filantropin blir en kvinna. Fattigvård och vålgöranhet under 1800-talet", i: *Historisk Tidskrift* :4.
- Jordansson, Birgitta (1998), *Den goda människan från Göteborg. Genus och fattigvårds-politik i det borgerliga samhällets framväxt*, Lund.
- Jordansson, Birgitta&Vammen, Tinne red. (1998), *Charitable woman: philanthropic welfare 1780-1930 : Nordic and interdisciplinary anthology*, Odense.
- Kaveh, Shamal (2006), *Det villkorade tillståndet. Centralförbundet för socialt arbete och liberal politisk rationalitet 1901-1921*, Uppsala.
- Lundquist, Lennart (1997), *Fattigvårdsfolket. Ett nätverk i den sociala frågan 1900-1920*. Lund political studies; 97. Lund.
- Plymoth, Birgitta (2002), *Fostrande försörjning. Fattigvård, filantropi och genus i fabriksstaden Norrköping 1872-1914*, Linköping.
- Press, Maria (1994), "Skyddsfruar och ordningsmän – en studie i 1800-talets nytänkande filantropi", i: *Studier och handlingar rörande Stockholms historia*, Vol.VII, Stockholm.
- Qvarsell, Roger (1993), "Välgöranhet, filantropi och frivilligt socialt arbete – en historisk översikt", i: SOU : 82. *Frivilligt socialt arbete*.
- Sjöberg, Marja Taussi&Vammen, Tinne red. (1995), *På tröskeln till välfärden. Välgöranhetsformer och arenor i Norden 1800-1930*. Stockholm.
- Sjögren, Mikael (1999), "Mellan privat och offentligt. Föreningen för välgöranhetens ordnande i

Stockholm kring 1900”, i: *Den privat-offentliga gränsen. Det sociala arbetets strategier och aktörer i Norden 1860-1940*, Nord 1999:9, København.

Swedner, Gunnel (1993), *Traditioner som fångslar. En studie av det sociala arbetets motiv och framträdelseformer i Göteborg under tiden 1790-1918*, Göteborg.

Thullberg, Per (1988), “Omsorgens utveckling i Stockholm som stadshistoriskt forskningsobjekt”, i: Hammerström, Ingrid, red., *Lokalt, regionalt, centralt – analysnivåer i historisk forskning*, Stockholm.

Trädgårdh, Lars red. (1995), *Civilt samhälle kontra offentlig sektor*, Stockholm.

Wisselgren, Per (2000), *Samhällets kartläggare. Lorénska stiftelsen, den sociala frågan och samhällsvetenskapens formering 1830-1920*, Stockholm.

Åberg, Ingrid. (1995), “Filantroper i aktion”. I: Sjöberg, M.T.&Vammen, T. red., *På tröskeln till välfärden. Vägöranhetsformer och arenor i Norden 1800-1930*. Stockholm.

●「戦略―関係」論的視点から「国家」と「国家権力」にアプローチする
ボブ・ジェツップ著／中谷義和訳／菊判・四四〇頁・七三三〇円(税込)

国家権力 ― 戦略―関係アプローチ

三〇年以上に及ぶ国家と国家論とりわけ資本主義国家の批判的検討の中から「戦略―関係アプローチ」に結実してゆく経緯が明らかにされる。

●大陸規模での「リージョナルな市民社会」形成への合流の試み
松下 冽著 ― A5判・五〇〇頁・八八二〇円(税込)

現代メキシコの国家と政治 ― グローバル化と市民社会の交差から
制度的革命党(PRI)政権期を中心にメキシコの民主化と市民社会の形成を「国家―社会」関係の変容・転換の視点から分析。

●社会民主党と緑の党との連立政権による改革の総合的評価
小野 一著 ― 菊判・四五〇頁・九〇三〇円(税込)

ドイツにおける「赤と緑」の実験

フォーティズムの体制政党たるSPDがユーロポリティクスの価値を包摂しつつ時代状況に対応すべく思想的自己刷新を行っていたか。

●われわれを支配する正義や法とは一体何か
堅田研一著 ― A5変型・二八〇頁・三三六〇円(税込)

法の脱構築と人間の社会性

法・正義の無根拠性を論じる「ジエーヴ・デリダ」・岩井克人の思想をヒントに政治・経済・市民社会の関係を考察する。

●国境を超えて移動する日系ブラジル人の生活世界と共生の現実
講座・トランスナショナルな移動と定住 定住化する在日ブラジル人と地域社会

小内 透編著 ― 各巻・A5判・二二〇頁・二六七五円(税込)

在日ブラジル人の労働と生活

日系ブラジル人集住地(群馬県太田・大泉地区、豊橋市、浜松市)で現実に進んでいる地域社会構造と地域住民の生活の変容を総合的に分析。

在日ブラジル人の教育と保育の変容

日系ブラジル人の子どもの教育と保育の現状、日本人との関係の変化をブラジル政府の在日ブラジル人に対する教育支援を含めて検討。

ブラジルにおけるデカセギの影響

ブラジルでの日系人集住地の社会調査から二〇年近くに及ぶ「デカセギ」現象がもたらした影響と「デカセギ」現象の変化について分析する。

御茶の水書房

〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20 Tel.03-5684-0751
ホームページ <http://www.ochanomizushobo.co.jp/>